

Title	三重県伊賀方言における動詞否定辞のバリエーションの動態 : 3 世代の談話資料に基づいて
Author(s)	中田, 浩季
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2022, 18, p. 1-25
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86403
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

三重県伊賀方言における動詞否定辞のバリエーションの動態

—3世代の談話資料に基づいて—

中田 浩季

【要旨】

三重県伊賀方言には、ン・ヘン・ヤン・ヤヘン・ナイという否定辞のバリエーションが存在する。本稿では内省及び談話資料の分析により、各否定辞の使い分けが生じる言語内的な条件と、使い分けにみる世代差について考察した。この結果、(i) 否定辞が生起する統語環境には、ある動詞に対して接続可能な否定辞が互換性をもつ「交代可能環境」と、ン・ヤンが専用される「ン・ヤン型環境」が存在する、(ii) 高・中年層は交代可能環境においてヘン・ヤヘンを、ン・ヤン型環境においてン・ヤンを動詞の属性等に応じて使い分けるのに対し、若年層はいかなる環境においてもン・ヤンを用いるように変化しつつある、(iii) 若年層における変化は、「否定辞体系としての合理化」及び「音韻的な負担の軽減」を求める変化であると位置付けられる、(iv) 変化が生じた一因として、ン類・ヘン類とまとめられる2種類の否定辞に存在した統語的な差異の消失が挙げられる、ということが明らかとなった。

【キーワード】 三重県伊賀方言、動詞否定辞、方言変化

1. はじめに

三重県伊賀方言(以下「伊賀方言」とする)で用いられる動詞の否定形には、(1)のように、ン・ヘン(ヒン¹⁾)・ヤン・ヤヘン・ナイといった多様なバリエーションが存在する。

(1) 今日(今日は)は疲れたからもう勉強 {セン/セーヘン/シーヒン/シヤン/シヤヘン/シナイ}。

サ変動詞の場合、(1)のように動詞に否定辞としてン・ヘン・ヤン・ヤヘン・およびナイを接続させることでこれらの形式が得られる。このような否定辞の併存は言語内外の様々な要因を反映して生じているものと思われるが、その使い分けには言語内的な要因が深く関わっている一方、世代によって使用のあり方が異なるように思われる。よって本稿ではこのような伊賀方言における否定辞のバリエーションの動態について、主として言語内的要因に注目しつつ分析していく。

論文の構成は以下の通りである。まず2節でフィールド情報を示し、伊賀方言の使用地域を確認する。続く3節で先行研究を示し、4節で問題のありかを確認する。5節では内省をもとに伊賀方言の否定辞のバリエーションを先行研究に照らしつつ整理する。6節で談話調査の概要を示し、7節でその結果の分析、8節で考察を行い、9節で全体をまとめる。

1) 動詞の種類によってはヘンとヒンの両方が接続できるものとヘンのみ接続できるものが存在する(5節で述べる)が、本研究ではこれらをヘンとしてまとめている。

2. 伊賀方言について

まず、本稿で研究対象とする伊賀方言について、その概要を確認しておく。榎垣(1962)によれば、全国の方言区画において近畿方言に含まれる三重県方言は、図1のように、北・中伊勢方言、伊賀方言、志摩・南伊勢方言、牟婁方言の四つに大別される。

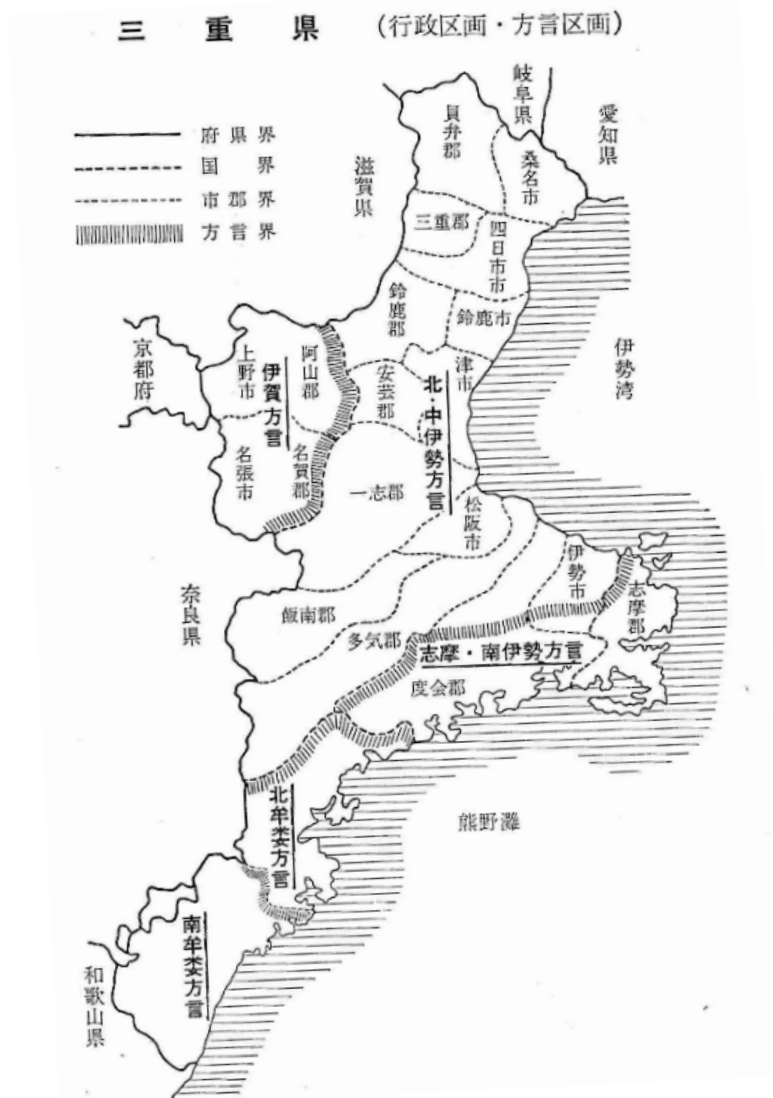


図1 三重県の方言区画（榎垣 1962 より引用）

方言域の東端に位置する鈴鹿山脈を境にして、伊賀方言は東側の北・中伊勢方言と音韻・語彙面で明瞭な差異がみられる一方、西側の奈良県方言とは共通する要素が多いとされる。なお、現在の行政区分では、榎垣(1962)の区分による伊賀方言域は伊賀市および名張市の全域に相当し、本研究でもこの範囲を伊賀方言域として扱う。

3. 先行研究

ここでは、本研究に関連する先行研究を示す。伊賀方言における動詞否定辞のバリエーションに関する先行研究は限られているが、2節で述べたように、伊賀方言は奈良県方言との共通点が多いことが指摘されており、動詞否定辞に関しても奈良県方言、あるいはさらに範囲を広げて関西方言における先行研究を参考にすることができる。したがって、ここではまず三重県方言・伊賀方言における先行研究を示し(3.1)、併せて関西方言における先行研究も示す(3.2)。

3.1. 伊賀方言における否定辞研究

三重県における動詞否定辞の使用実態を調査したものとしては、三重県下の小中学生に対して質問紙による調査を行った矢野(1956)がある。これによれば、三重県方言において広く用いられている否定辞は「～ン」「～セン」「～ヘン」「～ヒン」「～ヤン」であるという。中でも「～セン」と「～ヘン」の使用が顕著であるが、伊賀地域においては「～ヘン」が「～セン」よりも優勢であることが示されている。

伊賀地域のみを対象として行われた調査としては、中井・能美(2013)がある。この調査は旧上野市域で生まれ育った70歳以上の話者に対して行われた面接調査である。動詞否定辞は「食べない」「見ない」について調査されており、質問は「『見ない』のことをミーヒンと言いますか。」のような形式となっている。これによれば、「食べない」はタベヘン>タベヤン>タベンの順に「自分が使う」と答えたインフォーマントが多く、「見ない」は9割以上のインフォーマントがミヤヘンを「自分が使う」と回答した一方、メーヘン・ミーヒン・ミヤンについて「自分が使う」と答えたインフォーマントは少数にとどまったという。

3.2. 関西方言における否定辞研究

一方、関西の方言における否定辞の使い分け、とりわけンとヘンの関係についてはこれまでに多くの研究がなされてきた。

前田(1955)は、大阪方言における「ん」と「へん」の関係を、否定の意味の強弱という観点から記述した。これによれば、「ん」には意味的な強弱のない「本来の打消」と、強い打消しの効果をもつ「強消」が存在するという。これに対し、～シハセヌ²⁾という形で動詞の肯定形そのものを否定することから生じた「本来の強消」としての「へん」は、「強消」の意味を失い、否定的意味の弱い「弱消」に転じているとされる。しかし、意味の強弱に応じてどんな「ん」でも「へん」に置き換えられるというわけではなく、「ん」が「本来の打消」として用いられる場合、「ん」のもつ①「慣用性」、②「対自性」、③「異化性(瞭化性)」、④「論理性」という性質によって、「へん」への置き換えが抑制されるとした。

2) 前田(1955)の表記のとおり。本稿におけるとりたて否定形式のカタカナ表記はそれぞれの箇所ですべて引用する文献に従っている。

- ①「慣用性」…「ん」を用いる形が決まり文句となる場合。
 - (2) さあ斬れ、早う斬らんかい。
- ②「対自性」…(副詞 ヨ を伴って)自己の動作についていう場合。
 - (3) そんな阿呆らしいことようせんわ。
- ③「異化性」…可能動詞を打ち消す場合。
 - (4) うっかり法螺も吹けん。
- ④「論理性」…体言に接続する場合。
 - (5) 要らん冗談(てんご)ばかりしてるさかい。

(以上、例文は前田 1955 より引用、下線は筆者が付した。)

これに対し、談話データと内省をもとに関西若年層の否定辞の使用実態を考察した高木(1999)は、関西の若年層においては、前田(1955)のいう「本来の打消」における ン の慣用的な用法は維持されているものの、強消・弱消という二つの否定辞の間に存在した意味的相違は失われており、両者は「意味的に完全に同一である」としている。

また、高木(2004)は ン ・ ヘン に加えて標準語形式である ナイ を分析対象に加え、若年層関西方言話者の動詞否定辞の使用について詳細な分析を行い、語彙的制約・音韻制約・文中における位置(否定辞が主節末に生起するか従属節中に生起するか)のほか、否定辞の形態が ヘン と ン の選択にもたらす影響を示している。高木は、否定辞 $\sim\text{ヘン}$ ・ $\sim\text{ン}$ ・ $\sim\text{ナイ}$ について、「基本形(いわゆる終止形および終止形と同形のもの)」、「 $-\text{kaQ}$ 形(過去表現「 $\sim\text{ナカッ}$ 」や仮定表現「 $\sim\text{ナカッ}$ 」のような「 カッ 」という形態をもつもの)」、「 $-\text{ku}$ 形(「 $\sim\text{ナク}$ 」)のような「 ク 」という形態をもつもの)の三種類の形態に分け、関西若年層において「基本形」では $\sim\text{ヘン}$ が、「 $-\text{kaQ}$ 形」では $\sim\text{ン}$ が多用され、「 $-\text{ku}$ 形」では「 $\sim\text{ンク}$ 」・「 $\sim\text{ヘンク}$ 」という伝統方言にはない形式が現れる傾向にあることを示している。

4. 問題のありか

当時の小中学生に対して行われた矢野(1956)の調査からは既に60年以上が経過しており、中井・能美(2013)の調査もインフォーマントが70歳以上の高年層に限られていることから、両研究は概ね現在の高年層にあたる世代の人々を対象とした研究であるといえる。しかし、両研究が記述した内容は現在の若年層である筆者の内省とは異なる点が多い。例えば若年層は ヘン のみならず ン も多用し、「見ない」を ミヤヘン と言うことは少ないように思われる。このため、両研究では対象となっていない現在の中年層・若年層の否定辞使用のあり方は明らかになっておらず、通時的な視点から伊賀方言の否定辞使用について記述する必要がある。

また、どの世代においてもある動詞に対して単一の否定辞を用いているとは考えにくく、様々な言語内的要因に応じて複数の否定辞を使い分けているものと考えられる。このため、面接調査・アンケート調査ではなく、実際の談話における用例を分析することで、否定辞の使用の実態をより網羅的に明らかにすることができると考える。

さらに、すでに述べたように、伊賀方言においては関西方言で広く用いられている ン ・

ヘン以外にもヤン・ヤヘンという方言否定辞が存在する。このため、関西方言における否定辞研究で問題とされてきたンとヘンという二種類のバリエーションの対立という視点だけでは説明できない部分がある。例えば、高木（1999）では、以下のように一段動詞の否定形に/d/ /m/ /n/が後接する場合、肯定形の撥音便形と同音となるため否定辞ンが使えず、専らヘンが用いられることが示されている。

(6) 俺もー テストとか、 ウケンで もー、絶対。(受けるよ)

(7) a. 俺もー テストとか、 ウケヘンで もー、絶対。

b. * (否定表現として) 俺もー、 テストとか、 ウケンで もー、絶対。

(高木 1999 より引用、下線は筆者が付した。)

(6) および (7b) において、肯定の意味を表す前者と否定の意味を表す後者が同音となり衝突が生じる。従って、このような場合否定辞としてンを使うことができず、(7a) のように専らヘンが用いられる。この規則は伊賀方言にも当てはまるが、伊賀方言において、一段動詞に対してはン・ヘンのみならずヤン・ヤヘンという否定辞のバリエーションが存在する。

(8) 俺もー テストとか、 {ウケヤン/ウケヤヘン}で もー、絶対。 [作例]

(8) のように、これらの否定辞を用いれば上記の衝突は生じないため、関西方言のようにヘンが専用されるとは限らない。よって、ン・ヘン以外の否定辞も視野に入れた上でその使い分けについて考察する必要があるように思われる。

以上のことから、本研究では以下の二点をリサーチ・クエスションとして設定する。

(a) 伊賀方言において、ン・ヘン・ヤン・ヤヘン・ナイの各動詞否定辞の使い分けがどのようになされているのか。

(b) 世代間で動詞否定辞の使い分けにどのような変化がみられるのか。

5. 伊賀方言における動詞否定辞

分析に移る前に、伊賀方言において用いられる動詞否定辞のバリエーションを筆者³⁾の内省に基づいて整理しておく。

伊賀方言において動詞否定辞が用いられる統語環境には、その動詞に対して接続することが可能な否定辞すべてが互換性をもつ環境と、ヘン・ヤヘン・ナイが生起できず、専らンまたはヤンが用いられる環境の2種類が存在する。本研究では便宜上前者を「交代可能環境」、後者を「ン・ヤン型環境」と呼ぶこととする。

また、本動詞と補助動詞の両方が存在する動詞のうち、「いる」および「ある」は本動詞と補助動詞で否定辞の接続に違いがある。したがって、本研究では否定辞が動詞に直接接続する形式を「動詞の否定形」と呼び、「～ている・てある」の否定形は「アスペクトの否定形」と呼んで両者を区別する。動詞の否定形とアスペクトの否定形のそれぞれに交代可能環境とン・ヤン型環境が存在する。

3) 筆者は1998年三重県伊賀市生まれで、居住歴は以下の通りである。

三重県伊賀市(0歳～18歳)、大阪府豊中市(18～21歳)、三重県伊賀市(21歳～現在)

以下、5.1で動詞の否定形を構成する場合について、5.2でアスペクトの否定形を構成する場合について、交代可能環境とン・ヤン型環境のそれぞれにおける否定辞のバリエーションと接続について整理していく。

5.1. 動詞の否定形を構成する場合

まず、動詞の否定形を構成する場合の否定辞のバリエーションについて整理する。5.1.1で動詞の否定形を構成する場合の否定辞の接続を示し、関連する先行研究にも触れながらそれぞれの否定辞について簡単に説明する。その後、5.1.2でン・ヤン型環境に該当する統語環境を列挙する。

5.1.1. 動詞の否定形における否定辞の接続

伊賀方言における否定辞の動詞の活用の種類ごとの接続は以下の表1の通りである。ただし、ここで示すそれぞれの形式は、実際の使用頻度や使用される環境とは関係なく、当該の形式が適格であるか否かのみに基づいて挙げている。なお、矢野（1956）が挙げている「～セン」は、現在では世代を問わずほとんど用いられていない否定辞であると思われるため、本稿では研究対象としない。

表1 伊賀方言における動詞否定辞（動詞の否定形）

	五段動詞 (走る)	上一段動詞 (見る)	下一段動詞 (出る)	カ変動詞 (来る)	サ変動詞 (する)
ン	ハシラン	ミン	デン	コン	セン
ヘン	ハシラヘン	メーヘン	デーヘン	ケーヘン コーヘン	セーヘン
ヒン		ミーヒン		キーヒン	シーヒン
ヤン		ミヤン	デヤン	キヤン コヤン	シヤン
ヤヘン		ミヤヘン	デヤヘン	キヤヘン コヤヘン	シヤヘン
ナイ	ハシラナイ	ミナイ	デナイ	コナイ	シナイ

以下、それぞれの否定辞について簡単に説明する。

ンはほとんどの動詞に接続できるが、4節で述べたように、一段動詞において否定形に/d/ /m/ /n/が後接する場合は音韻制約により接続できない。

ヘンは高木（1999）にまとめられているように、動詞語幹末母音が/a/ /e/ /o/の場合に、ヒンは/i/の場合に用いられる。なお、ヒンはヘンが進行同化を起こしたものである。また、上一段動詞にヘンが接続する場合は、逆行同化によりメーヘン《見ない》のようになる。前田（1955）にも言及がある通り、一般にヘンは「～シハセヌ」という形式から生じたものとされる。

ヤンは五段活用以外の動詞に接続する。鳥谷（2015）は、これまでヤンの用例がほとんどみられなかった、大阪府を中心とする近畿中央部においても若年層の間でヤンの使用が広がっていることを指摘している。鳥谷はその要因について、伝統的にヤンが用いられてきた和歌山県や三重県から大阪府下へ通学する学生による持ち込みの可能性を指摘している。

ヤヘンは原則としてヤンと同様に五段以外の動詞に接続する⁴⁾。動詞語幹末母音が/i/の動詞（上一段、カ変、サ変動詞）の場合、活用語尾と否定辞が一体となって長音化し、ミャーヘン（見ない）、キヤーヘン（着ない／来ない）、シャーヘン（しない）のように発音されることもあるが、本研究ではこれらもヤヘンとしてまとめている。日高（1994）にもまとめられているように、ヤヘンは「～シハセン」という形式が否定辞ヘンへと変容する過程の形態をとどめたものであると考えられる。

なお、カ変動詞におけるコーヘン・コヤン・コヤヘンはネオ方言形式⁵⁾であると考えられ、主に中年層・若年層の間で聞かれる表現であるように思われる。

以上のように、動詞の否定形の場合は、五段動詞ではン・ヘン・ナイが、その他の動詞では基本的にはン・ヘン・ヤン・ヤヘン・ナイがそれぞれバリエーション関係にある。

5.1.2. ン・ヤン型環境

続いて、動詞の否定形におけるン・ヤン型環境についてまとめる。動詞の否定形における否定辞の接続は表1の通りであるが、以下①～③に示すン・ヤン型環境では、ヘン・ヤヘン・ナイを用いることができず、専らンまたはヤンが用いられる。なお以下では関連する先行研究にも触れるが、それらの先行研究においてはンが専用されるとされる環境においても、伊賀方言の場合、一段・変格動詞に対しては基本的にンとヤンの両方が生起する。

①ト・トクが後接する場合

(9) (10) のように否定辞にトが後接して付帯状況を表す場合（「～しないで」）、および結果の維持・事前の処置を表すアスペクト形式トクが後接する場合（「～しないでおく」）、ンまたはヤンが専用される。

(9) 余分な話セント本題に移ろにさ。《余分な話はしないで本題に移ろうよ。》

[調査2:OF1⁶⁾]

4) ただし、筆者の内省ではヤヘンを語幹が二拍以上の動詞に接続させると許容度がかなり低くなるように思われる。よって7.1.2では接続する動詞の拍数ごとの使用率を実際のデータをもとに分析する。

5) 真田（1987）は、近年関西中央部の若年層が多用する傾向にある「来ない」の打消しの形式「コーヘン」について、標準語形式「コナイ」の干渉を受けて新しく成立した形式であるとしている。真田（1987）にコヤン・コヤヘンについての言及はないが、筆者の内省では高年層にはこの形式が用いられず、専らキヤン・キヤヘンが用いられると思われることから、「コーヘン」と同じように成立したネオ方言形式であると考えられる。

6) 以下、例文として実際の用例を掲載する場合には、末尾に談話ID・話者IDを〔談話ID：話者ID〕のように示す。談話と話者の詳細な情報は6節で示している。

(10) なんぼ喋らんとケ《喋らないでおけ》って言うても喋るから。[調査3:OM1]
前田(1955)は、(9)のようなトを伴って付帯状況を表すンが古典語の「ず」に由来するのに対し、ヘンと互換性のあるンは「ぬ」に由来しており、そのような語源の違いが否定辞の互換性の有無に関係していることを示唆している。

また、(11)のように付帯状況と同様にトを伴って否定の条件(「～しなければ」)を表す場合も、ン・ヤンが専用される。これについて前田(1955)は、「条件法(順接)」として、「本来の打消」としてのンの「慣用性」によって、ヘンではなくンが用いられるとしている。

(11) 二、三個用意しヤンと《用意しないと》足りひんで。 [調査1:YM2]

②ナン型の義務形式を構成する場合

伊賀方言には、義務(「～しなければならない」)を表す場合、(12)のように「イカナアカン」「タベ(ヤ)ナアカン」の形でアカンが共起する形式と、(13)のように「イカンナン」「タベヤンナン」のようにナンが共起する形式の2種類が存在する。ここでは便宜上後者を「ナン型の義務形式」と呼ぶことにする。ナン型の義務形式が構成される場合、否定辞はン・ヤンが専用される。

(12) 七時過ぎぐらいに家出ヤナアカンしな。 [作例]

(13) 七時過ぎぐらいに家出ヤンナンしな。 [調査4:OF2]

③許可・譲歩を表す場合

(14)のように否定辞に「～て(も)いい」を表す形式が後接して「許可」を表す場合、あるいは(15)のように単に「～て(も)」が後接して「譲歩」を表す場合、ン・ヤンが専用される。

(14) 顔見せヤンでええさけえんやて。《顔を見せなくていいからいいんだよ。》

[調査6:OF4]

(15) 嫁さん帰らんでも《帰らなくても》子供連れて帰ってくる。 [調査4:OF3]

高木(2004)によれば、ヘンは本来(～シ)ワセヌという否定意志や否定判断を強めていう表現であることから、話し手の心的態度が表される主節末で多く用いられる形式であり、その特徴が現在も残存しているため、従属度の高い従属節を構成するこれらの形式においてヘンが生起しにくくなっているとされる。

5.2. アスペクトの否定形を構成する場合

次に、アスペクトの否定形を構成する場合についてまとめる。アスペクトの否定形を構成する場合に用いることができる否定辞はヘン・ナイ・ヤンである。動詞の否定形の場合と異なり、いずれの環境においてもアスペクトの否定形に対してンを用いることはできない。これについて高木(2004)は、「～ている・～である」相当形式の否定表現にンが後接した場合、①後続音が/d/ /m/ /n/の場合に肯定(～シテル)の撥音便形(～シ)テン、または②「(～し)たのだ」の意の(～シ)テンと同形となって同音衝突を起こすという音韻的制約が生じることをその理由に挙げている。また、アスペクトの否定形にヤヘンが用いられることもない。

交代可能環境においてはヘンまたはナイが用いられる。ヘンが用いられる場合は、高木(2004)がいうように「～テーヒン(ヘン)」ではなく「～テヘン」と接続する。

(16) 太郎は勉強をしてヘン。 [作例]

(17) *太郎は勉強をしていーヒン。 [作例]

(18) 太郎は勉強をして(い)ナイ。 [作例]

一方、5.1.2に挙げたようなン・ヤン型環境においては、ヘンおよびナイを使用することができない。ン・ヤン型環境のアスペクトの否定形に対しては、以下の①～③のように、否定辞としてヤンが専用される。ヤンが用いられる場合の接続もヘンの場合と同様に、「～テイヤン」ではなく「～テヤン」となる。

①トが後接する場合

(19) そんなとこいてヤンと。《そんなところにいるで。》 [調査2:OF1]

(20) 勉強してヤンと《していなければ》怒られる。 [作例]

②ナン型の義務形式を構成する場合

(21) けっと見てヤンなんねん。《いつも見ていないといけないんだ。》 [調査2:OF1]

③許可・譲歩を表す場合

(22) そんなに勉強してヤンでええ。《していなくていい。》 [作例]

一方、これらとは逆に、(23)のように交代可能環境ではアスペクトの否定形にヤンを用いることはできない。

(23) *太郎は勉強をしてヤン。《していない。》 [作例]

以上より、伊賀方言におけるアスペクトの否定形においては、交代可能環境ではヘンおよびナイがバリエーション関係にあり、ン・ヤン型環境では専らヤンが用いられる。すなわち、ナイ・ヘンとヤンが相補分布をなしているといえる。これをまとめ、交代可能環境とン・ヤン型環境における各否定辞の使用の可否を示したのが以下の表2である。

表2 アスペクトの否定形における否定辞の使用可否

	交代可能環境	ン・ヤン型環境
ン	×	×
ヘン	○	×
ヤン	×	○
ヤヘン	×	×
ナイ	○	×

6. 調査の概要

伊賀方言における動詞否定辞は、原理的には5節にまとめたような形態・用法をとるが、高木(1999・2004)が示すように、否定辞の実際の使い分けには接続する動詞の属性(活用の種類)や文中での生起位置など様々な要因が関わっており、複数の否定辞が言語内的な条件に応じて使い分けられているものと考えられる。また、その使い分けも各世代で一

様ではないように思われる。このため、本研究ではより網羅的にその使用実態と世代差を明らかにするために、矢野（1956）や中井・能美（2013）のようなアンケート調査ではなく、実際の談話を録音したデータから得られた用例を分析することとする。

6.1. 調査対象

本研究では、言語形成期を三重県伊賀地域で過ごし、両親もその条件を満たす人を調査対象とする。インフォーマントの条件をこのように設定したのは、同世代の生え抜き話者間で否定辞の使用率に差が生じる可能性を極力排除するためである⁷⁾。世代差を確認するため、インフォーマントを高年層・中年層・若年層に分けてデータを分析する。調査対象者のフェイス情報は表3の通りである。なお、話者IDのO/M/Yはそれぞれ高年層(Old)／中年層(Middle)／若年層(Young)を、M/Fはそれぞれ男性(Male)／女性(Female)を表している。

表3 話者のフェイス情報

話者ID	性別	生年 (調査時年齢)	居住歴
OM1	男	1931 (88)	三重県伊賀市 (0歳～現在)
OF1	女	1935 (85)	三重県伊賀市 (0歳～現在)
OF2	女	1947 (72)	三重県伊賀市 (0歳～現在)
OF3	女	1936 (84)	三重県伊賀市 (0歳～21歳)、大阪府寝屋川市 (21～22歳)、奈良県磯城郡田原本町 (22～25歳)、三重県伊賀市 (25歳～現在)
OF4	女	1945 (75)	三重県伊賀市 (0歳～現在)
OF5	女	1940 (81)	三重県伊賀市 (0歳～現在)
MM1	男	1963 (56)	三重県伊賀市 (0歳～36歳)、東京都墨田区 (37～38歳)、愛知県名古屋市 (38～39歳)、三重県伊賀市 (39歳～現在)
MM2	男	1961 (58)	三重県伊賀市 (0歳～現在)
MF1	女	1965 (54)	三重県伊賀市 (0歳～現在)
YM1	男	1998 (21)	三重県伊賀市 (0歳～現在)
YM2	男	1998 (21)	三重県伊賀市 (0歳～現在)
YM3	男	1998 (21)	三重県伊賀市 (0歳～15歳)、三重県津市 (16歳～現在)
YM4	男	1998 (21)	三重県伊賀市 (0歳～15歳)、三重県多気郡大台町 (16歳～18歳)、愛知県名古屋市 (19歳～20歳)、神奈川県横浜市 (20歳～現在)
YF1	女	1998 (22)	三重県伊賀市 (0歳～現在)
YF2	女	1998 (22)	三重県伊賀市 (0歳～現在)

7) たとえば宮治（1997）は、インフォーマントの「生え抜き度」（何代続いてその土地の生え抜きかという生え抜きとしての純度）によって、大阪方言における動詞否定辞の使用率に差がみられることを示している。

6.2. データ情報

本研究で用いる談話資料は8種類で、いずれも三重県伊賀地域で録音されたものである。談話は事前に参加者に了承をとったうえで録音されており、会話のテーマは特に定めず自由に会話をしてもらった。データの情報は表4の通りである。なお、収集した談話データには筆者が会話に参加しているものが含まれるが、本研究では筆者の発話については分析対象としない。

表4 談話データの情報

談話 ID	録音年月日	録音場所	参加者	録音時間
調査 1	2019/12/28	三重県名張市	YM1、YM2、YM3、YM4、筆者	2時間 40分 09秒
調査 2	2020/05/31	三重県伊賀市	OM1、OF1、MM1、筆者	1時間 39分 44秒
調査 3	2020/06/10	三重県伊賀市	OM1、OF1、MM1	1時間 31分 10秒
調査 4	2020/07/21	三重県伊賀市	OF2、OF3	44分 32秒
調査 5	2020/07/21	三重県伊賀市	MM2、YF1	27分 42秒
調査 6	2020/08/13	三重県伊賀市	OF4、MM1	36分 28秒
調査 7	2020/09/09	三重県伊賀市	MF1、YF2	1時間 33分 44秒
調査 8	2020/09/11	三重県伊賀市	OF5、MF1、YF2	1時間 32分 06秒

7. 分析

ここでは、6.2 に示した談話資料に現れた用例を分析し、否定辞の実際の使い分けとその世代差について分析する。ただし、高木（2004）が主張するように、否定辞の形態が異なれば多用される否定辞も異なる可能性が考えられる。そこで、高木（2004）に倣い、「-kaQ 形」または「-ku 形」に分類できる用例は分析の対象外としている。また、本研究では助動詞の否定形については分析対象としない。

なお、用例からは否定辞が否定の強弱に応じて使い分けられているような傾向はみられなかった。矢野（1956）は、三重県方言における否定辞セン・ヘンについて、「形は強い打消であるが、専ら普通の意味の打消にもちひられてゐる」としており、当地では早い時期から否定の強弱に基づく否定辞の使い分けが消失していたことが窺える。また、若年層である筆者の内省でも、各否定辞に明確な意味上の違いがあるようには思われなない。以上のことから、本研究では、伊賀方言の個々の否定辞には前田（1955）の想定するような否定の意味の強弱という面での差異は存在しないという立場から分析する。

以下、7.1 で動詞の否定形の交代可能環境について、7.2 で動詞の否定形のン・ヤン型環境について、7.3 でアスペクトの否定形について分析する。ただし、動詞の否定形に関して、否定辞がバリエーション関係にないと考えられる以下の①～④に示す用例は本研究における分析の対象としない。

- ①対応する肯定形をもたない慣用的な表現（アカン/カマヘン）

- ②「要る」「知る」「分かる」に接続する場合⁸⁾
- ③「ある」に接続する場合(高木 2004⁹⁾)
- ④副詞ヨーと共起して不可能を表す場合¹⁰⁾

7.1. 動詞の否定形における否定辞の使用実態(交代可能環境)

ここでは、交代可能環境の動詞の否定形における否定辞の使い分けについて分析していく。交代可能環境の動詞の否定形の用例は496例(高年層180例/中年層137例/若年層179例)であった。なお、アスペクトの否定形に分類される「～ている・～てある」を除き、本動詞と補助動詞の区別はしていない。また、談話中に「ネー」という形式が2例みられたが、本研究では「ナイ」の用例数に含めて分析している。

以下、動詞の活用の種類(7.1.1)、動詞の拍数(7.1.2)、文中における生起位置(7.1.3)の各観点から分析していく。

7.1.1. 動詞の活用の種類と否定辞の関係

図2は、談話から得られた動詞の否定形における否定辞の用例数を、動詞の活用の種類および話者の世代ごとにまとめたものである。図2から、どの世代においても、動詞の活用の種類によって否定辞の使用傾向に違いがみられることがわかるが、活用の種類を問わず、高年層と中年層の間では否定辞の使用率にあまり違いがみられない一方、若年層の否定辞の使用率は他の世代のものとは大きく異なっている。

五段動詞について、高・中年層ではヘンの使用が8割以上を占め、シの使用は少数にとどまっているのに対し、若年層では逆にシの使用が7割近くを占め、ヘンとシの使用率が逆転している。一方、一段動詞ではどの世代でもヘンが多数を占め、シの使用がほぼみら

-
- 8) これらの動詞は、専用とまではいえないにしても、相対的にシが多用される傾向が認められるため、分析対象から外している。高木(1999)によれば、状態性の強い動詞(「要る」・「知る」)、およびその他の状態性を持つ動詞(対応する肯定形を持たない動詞)に対してはシが専用される傾向にあるという。今回の調査においても、世代ごとにその割合は異なるが、両者に対しては相対的にシが多く用いられる傾向が認められた。また、高木(2004)は、「要る」「知る」以外に「分かる」もシが多用される傾向にあるとしており、本研究において「要る」「知る」同様にデータを確認したところ、「分かる」についてもそれらと同様の傾向がみられた。
 - 9) 高木(2004)は、存在動詞アル・イルでは否定辞-シが用いられず、専ら-ヘンが用いられるとした。ただし、「いる」については、伊賀方言ではヘン・ヤン・ヤヘン(またはナイ)が後接しうるため、特定の否定辞が専用されるわけではないことから、分析の対象外とはしていない。
 - 10) 同様の形式は大阪方言などにもみられる。郡(1997)によれば、大阪方言の場合、この構文においては主語が一人称または二人称のときには否定辞がシしか使えないが、三人称のときにはシとヘンの両方が使えるとされている。また、先述したように、前田(1955)は、この構文において自己の動作について言う場合、シの「対自性」によってシが専用されるとしている。伊賀方言においてもこのような主語の人称による否定辞の使い分けが存在する可能性はあるが、若年層には用いられない表現であり筆者の内省が及ばないこと、また談話に現れた用例の数もそれほど多くないことから本研究では分析の対象外とする。

三重県伊賀方言における動詞否定辞のバリエーションの動態

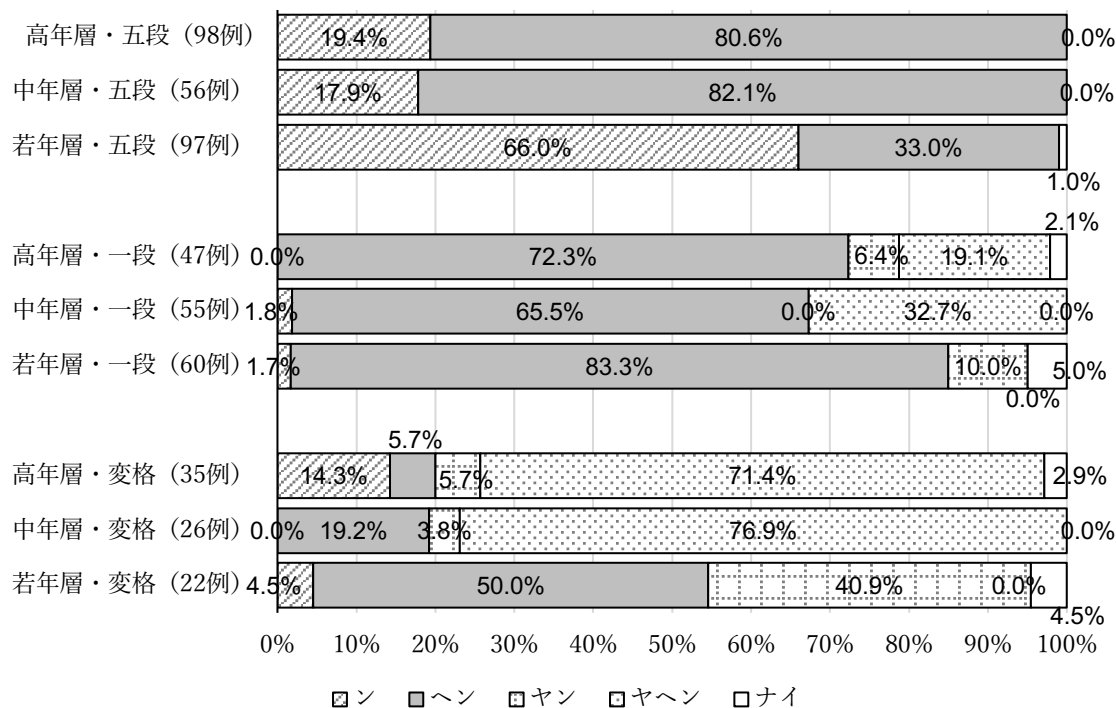


図2 動詞の活用の種類ごとの否定辞使用率

れないことが分かる。高・中年層で使用が目立つヤヘンの用例が若年層でみられないが、この点については 7.1.2 で詳しく述べる。また、変格動詞においても、高・中年層ではヤヘンの使用が7割以上を占めるが、若年層ではやはり用例が1例もみられず、代わってヘン・ヤンの使用が目立つようになっている。

7.1.2. 動詞の拍数と否定辞の関係

続いて、否定辞に接続する動詞の拍数と否定辞の関係を分析する。以下の表5は、一段動詞において用いられた否定辞を動詞の語幹の拍数および世代別にまとめたものである。

表5 一段動詞の語幹拍数と否定辞の関係

	ン	ヘン	ヤン	ヤヘン	ナイ	計
高年層・一段・1拍	0	0	1	9	0	10
高年層・一段・2拍以上	0	34	2	0	1	37
中年層・一段・1拍	0	2	0	18	0	20
中年層・一段・2拍以上	1	34	0	0	0	35
若年層・一段・1拍	0	0	0	0	0	0
若年層・一段・2拍以上	1	50	6	0	3	60

(数字は実数)

表5より、一段動詞においては、語幹が2拍以上の場合、高・中年層ではヘンの使用が大半を占め、若年層でも一部ヤンおよびナイの使用がみられるもののヘンの使用が大多数を占めている。これに対して、語幹が1拍の場合は高・中年層でヤヘンの使用が大半を占めるようになり、ヘンの使用がほとんどみられなくなる。

若年層については、今回の談話からは語幹1拍一段動詞の否定形の用例が得られなかった¹¹⁾ため、若年層の語幹1拍一段動詞で高・中年層と同様にヤヘンの使用が顕著に現れるのかどうかは不明だが、7.1.1で挙げた変格動詞における若年層の間でのヤヘンの衰退をみる限り、一段動詞におけるヤヘンの使用率もそれほど高くはならないことが予想される。それとは逆に、高・中年層において、語幹1拍一段動詞と変格動詞でヤヘンの使用率が顕著に高いことから、動詞の否定形において、五段以外の動詞で動詞部分が1拍となる場合、否定辞はヤヘンがデフォルトとして用いられると考えることができる。

一方、五段動詞においてはどの世代でも動詞の拍数と用いられる否定辞の間に明確な相関はみられず、拍数に関わらず図2に示したような使用率で安定していた。

7.1.3. 文中における生起位置と否定辞の関係

ここでは、否定辞の文中における生起位置（動詞否定辞が主節末に生起するか従属節中に生起するか）と使用される否定辞の関係を分析する。

ここまでの分析によって、一段動詞ではどの世代でもヘンの使用が大多数を占め、高・中年層では語幹が1拍の場合ヤヘンがほぼ専用されることが分かった。一方、五段動詞では動詞の拍数と使用される否定辞に相関がみられないが、高・中年層ともに、ヘンが優勢ではありながらもンの使用もある程度みられる。そこで、ここでは動詞否定辞の文中での生起位置に着目して、五段動詞におけるンとヘンの使い分けについてさらに分析を試みる。

動詞否定辞の文中での生起位置が否定辞の選択に関係しているという点は、複数の先行研究で言及がある。宮治（1997）は、大阪の若年層男性の間で否定辞～ンの使用が増加していることを挙げた上で、文末に使用される～ンは主観的な表現としての意味合いが強く、話し手の主観をことばの上に反映させたい場合において、前田（1955）で挙げられている「対自性」を有する～ンが選択されるようになってきているとしている。また、5.1.2でも挙げたように、高木（2004）は、（～シ）ワセヌという形式に由来する～ヘンは本来話し手の心的態度が表される主節末においてよく用いられる形式であったとしており、否定辞の語

11) 若年層で語幹1拍一段動詞の用例が現れなかった原因として、方言変化の結果、一般の会話において若年層が語幹1拍一段動詞を使用する頻度が他の年代よりも少なくなっていることが考えられる。表5に示す高・中年層における語幹1拍一段動詞の用例は合計で30例であるが、このうち19例が標準語「いる」と同形のイルを否定したイヤヘンであった。『方言文法全国地図』第4集第196図「いた」を確認しても、伊賀地域には〈ita〉が分布しており、当地ではイルが伝統方言形であったものと思われる。これに対し、若年層の談話データからはイルを否定した用例はみられず、「いる」の西日本方言形オルを否定したもの（オラヘン・オラン）が21例みられた。高・中年層でオルを否定した用例は1例しかみられなかったことから、イルからオルへのシフトが起こっていると考えられ、その結果若年層における語幹1拍一段動詞の使用が少なくなっている可能性がある。

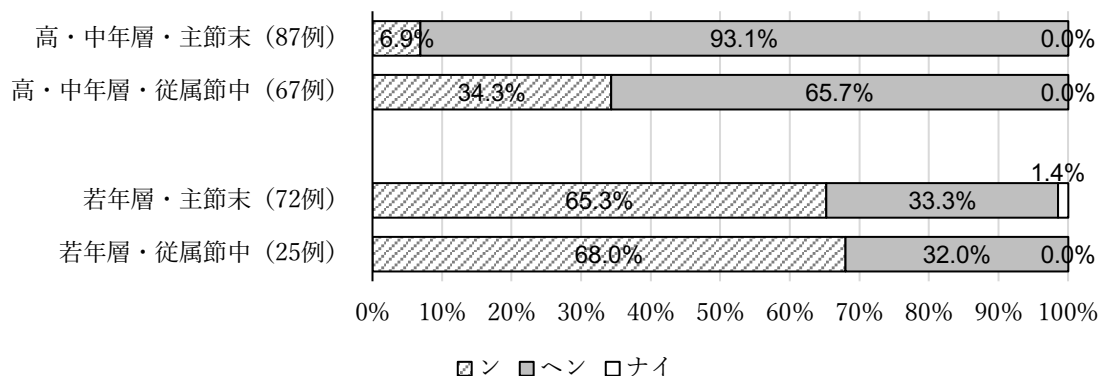


図3 動詞否定辞の生起位置別の否定辞使用率（五段動詞）

源の違いが否定辞の生起のしやすさに影響しうることを示唆している。

収集したデータのうち、五段動詞の用例について、動詞否定辞が主節末に生起するか従属節中に生起するかによって分類し、高・中年層と若年層で比較したのが以下の図3である。図3から、高・中年層の五段動詞について、従属節中に動詞否定辞が生起する場合、主節末に生起する場合に比べてンの使用率が高くなる（ヘンの使用率が抑えられる）ことが分かる。一方、若年層ではそのような傾向はみられず、文中の生起位置に関係なくンが7割弱の使用率で優勢となっていることが読み取れる。

このことから、高・中年層では、高木（2004）のいうようなヘンの語源に由来する従属節中での生起のしづらさが残存している可能性があり、逆にそのような制限のない主節末においてはほぼヘンが専用されるとみることができる。これに対し、若年層の間では動詞否定辞の生起位置とは関係なくンの使用率が高くなっているものと考えられ、高・中年層にみられるようなンとヘンの統語上の差異が明確でなくなっていることが読み取れる。

7.2. 動詞の否定形における否定辞の使用実態（ン・ヤン型環境）

続いて、ン・ヤン型環境の動詞の否定形における否定辞の使用実態について、用例をもとに分析する。該当する用例数は112例（高年層58例／中年層38例／若年層16例）であった。5.1.2で述べたように、ン・ヤン型環境の動詞の否定形では否定辞として専らンまたはヤンが用いられるが、動詞の活用の種類、あるいは話し手の世代によって、ンとヤンのどちらが多用されるかが異なっている。

表6は、ン・ヤン型環境における否定辞の用例数を、動詞の活用の種類および世代別に合計してまとめたものである。先にも述べたように、ン・ヤン型環境においては高年層の1例（(24)に示す）を除けば世代を問わずンまたはヤンが専用されていることが表6からもわかる。

(24) 別に言わへんでもええのに。 [調査3:OM1]

どの世代でも、五段動詞ではンが、一段動詞ではヤンが専用されている。5.1.2で提示した他地域を対象とした先行研究ではンが専用されるとされていた環境であっても、一段動

表6 ン・ヤン型環境における用例数

	ン	ヤン	ヘン	ヤヘン	ナイ	合計
高年層・五段	27	0	1	0	0	28
中年層・五段	21	0	0	0	0	21
若年層・五段	9	0	0	0	0	9
高年層・一段	0	15	0	0	0	15
中年層・一段	0	8	0	0	0	8
若年層・一段	1	3	0	0	0	4
高年層・変格	13	2	0	0	0	15
中年層・変格	1	8	0	0	0	9
若年層・変格	0	3	0	0	0	3

(数字は実数)

詞に対してはンを用いることが避けられ、代わりにヤンが専用されているといえる。一方、変格動詞では世代によってン・ヤンの使用率が異なっており、用例数はそれほど多くないものの、世代が若くなるほど変格動詞に対してヤンを用いる傾向が高まっているということがいえそうである。

7.3. アスペクトの否定形における否定辞の使用実態

続いて、アスペクトの否定形における否定辞の使い分けについて、用例をもとに分析する。交代可能環境のアスペクトの否定形の用例数は197例（高年層37例／中年層37例／若年層123例）であった。なお、「～ていない」を表す表現として、若年層に「～(シ)トラン」という形式が3例みられたが、これは例外的な形式であるとみなし、集計の対象とはしていない。以下の図4は、各世代における否定辞の使用率をまとめたものである。

図4のように、動詞の否定形と同様、高・中年層と若年層の間で否定辞の使用率に顕著な差がみられる。高・中年層ではヘンの使用率がナイを大きく凌駕しているのに対し、若年層においては反対にナイ専用ともいえる状況に近づいているといえる。

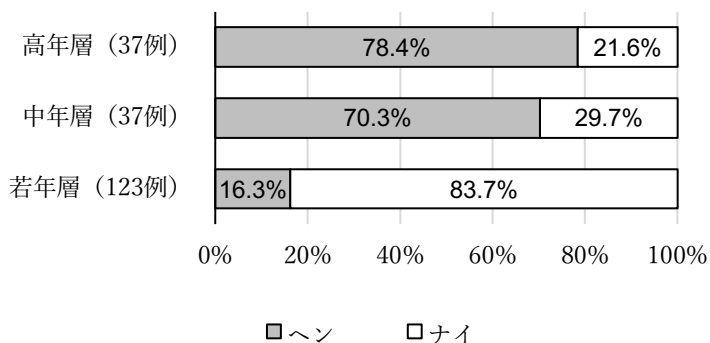


図4 アスペクトの否定形（交代可能環境）

高木（2004）は、関西若年層の傾向としてこれと同様の傾向を指摘している。高木によれば、関西の若年層で方言形（～シ）テヘンの使用が減ってナイの使用が増えている理由として、以下の二つが挙げられるという。

① 「動詞テ形+用言」という構造を持つ表現との対比にみる（～シ）テヘンの特殊性：
（～シ）テイク、（～シ）テクルなどの他の「動詞テ形+用言」におけるイク、クルなどの補助用言と異なり、否定辞ヘンは単独では用いないため、（～シ）テヘンは特殊な形態であるといえる。

② 標準語形否定辞ナイの独立性：

①に対し、「ない」は単独で形容詞として用いることができることから独立性が高く、（～シ）テイク、（～シ）テクルなどと同様に「ない」を独立したものとして取り出すことができる。また、関西方言にも形容詞ナイが存在したため（～シ）テナイが抵抗なく受容された。

なお、ン・ヤン型環境におけるアスペクトの否定形の用例は3例みられたが、用いられた否定辞は5.2で述べたようにすべてヤンであった。

8. 考察

ここまで、談話データから伊賀方言における否定辞の使い分けについて分析を行ってきた。ここで、4節で設定したリサーチ・クエスチョンを再掲する。

(a) 伊賀方言において、ン・ヘン・ヤン・ヤヘン・ナイの各動詞否定辞の使い分けがどのようになされているのか。

(b) 世代間で動詞否定辞の使い分けにどのような変化がみられるのか。

これに対し、ここまでで明らかになったことをまとめると、以下のようになる。

(A) 伊賀方言において、動詞否定辞が用いられる統語環境には、接続可能な各否定辞が互換性をもつ環境（交代可能環境）と、世代を問わず動詞の活用の種類に応じてン・ヤンが専用される環境（ン・ヤン型環境）の2種類が存在する。前者の場合、動詞の活用の種類・拍数・動詞否定辞の文中での生起位置といった属性に応じて優先して用いられる否定辞が存在する。

(B) 動詞否定辞の使い分けには、高・中年層と若年層の間で大きな差異がみられる。動詞の否定形では、交代可能環境において、前者では動詞の活用の種類・拍数に応じてヘンまたはヤヘンが常に多数派となり、従属節中に生起する場合を除けばほぼデフォルトとして用いられる。一方後者では、五段動詞においてンの使用率がヘンの使用率を上回り、五段動詞以外でヤンの使用も目立つようになる一方、ヤヘンの使用はほとんどみられなくなる。また、ン・ヤン型環境について、五段動詞ではン、一段動詞ではヤンが世代を問わず専用されるが、変格動詞では世代が若くなるほどンではなくヤンを用いる傾向が強まる。アスペクトの否定形では、ヘンを多用する高・中年層とは対照的に、若年層ではナイの専用に向かっており、関西方言と同様の傾向がみられる。

高・中年層と若年層の間で使用率に大きな差異がみられることから、伊賀方言の動詞否

定辞の使い分けにここ 30 年ほどの間で大きく変化が生じていることが推察される。

それでは、この変化はいかなる指向に基づく変化であるといえるのか。以下では、分析の結果をもとに、伊賀方言の動詞否定辞に生じている変化が何を指すものであるのか、またその要因は何かということについて考察していく。まず 8.1 で否定辞使用の変化の実態について改めて整理しつつ、ン・ヤンの使用範囲の変化について言及する。その上で、この変化を「体系としての合理化 (8.2)」と「音韻的な負担の軽減 (8.3)」という二つの言語内的側面から位置付け、8.4 で分析の結果を踏まえつつ変化が生じた要因について考察を試みる。

なお、アスペクトの否定形における否定辞使用の変化要因については、7.3 で示したように高木 (2004) で詳細な考察がなされており、高木の主張を伊賀方言にも適用することが可能であると考えられることから、以下では主に動詞の否定形における否定辞体系の変化に着目して考察していくこととする。

8.1. 否定辞使用の変化

7 節でみたように、交代可能環境の場合、高・中年層において、五段動詞に対しては基本的にヘンが多用され、ンはヘンが使えない場合 (ン・ヤン型環境) にのみ用いられるという性格が強い。すなわち、否定辞としてヘンがデフォルトとみなされているとよい。これに対し、若年層においては交代可能環境でもンの使用率がヘンを凌駕している。

一方、7.1.1 の図 2 でみたように、若年層でも一段動詞に対してはンをほとんど用いておらず、ヘンの多用が維持されている。このことから、世代を問わず、ン・ヤン型環境の場合も含めて、一段動詞に対しては否定辞としてンを用いることが強く忌避されていると考えることができる。この傾向が生じる背景には、4 節で示したンのもつ音韻制約の存在が考えられる。高木 (2004) は、関西若年層の一段動詞の否定形について、「使用できる環境に制限のある～ンを避け、どんな環境においても使う事のできる～ヘンを多用する傾向にある」としている。これと同様のことが伊賀方言においてもいえるようである。

しかし、ヘン (またはヤヘン) は万能であるとはいえず、ン・ヤン型環境においては基本的にヘンを用いることができない。そこで用いられるようになったのが否定辞ヤンであると考えられる。

五段動詞のン・ヤン型環境におけるンの専用は、否定辞をヘンに代替することが不可能であることから、前田 (1955) のいうンの「本来の打消」としての機能を残すものであると考えられる。しかし、一段動詞の場合は音韻制約が強く働くために¹²⁾、ンを用いることが忌避され、ンもヘン (またはヤヘン) も使えないという状況が生じる。この問題を解消するために、ンにヤを介在させた否定辞ヤンを用いることで、一段動詞にンを接続させることを回避しつつ、ヘンを用いる事のできない形式が共起した場合に対応しているものと考えられる。

12) 音韻制約の生じない変格動詞に対してはヤンが専用されるわけではなく、高年層を中心にンの用例もみられることから、一段動詞にほとんどンが用いられないのは音韻制約が存在するためであることが分かる。

5.2 で示したようなン・ヤン型環境におけるアスペクトの否定形にヤンが専用される理由も、動詞の否定形と同様に考えることができる。すなわち、ン・ヤン型環境において、本来アスペクト形式を形成していた一段活用の補助動詞「いる」に対して、本動詞の場合と同様にンの使用が忌避されて生じた「～テイヤン」という形式が、使用できる環境に制限のあるアスペクト形式におけるヤンの使用として残存しているものと思われる。先に示した(23)(以下に(25)として再掲)のように、交代可能環境のアスペクトの否定形においてヤンが使えないのは、補助動詞「いる」に対してヤンを使う必要性がないために、原則通りにヤヘン(あるいはヘン)が用いられてきたことの名残であると考えることができる。このことから、本来一段動詞におけるヤンの使用が音韻制約を回避するために用いられていたものであったということが分かる。

(25) *太郎は勉強をしてヤン。《していない。》 [(23)再掲]

それでは、ヤンという形式はどのようにして生じたのであろうか。ヤンの出自については諸説あるが、日高(2014)によれば、それらは以下の2種類の立場に大別できるとされる。

(I) (イカセン>イカン等からの類推により) ヤヘンからヤンが生じた(真田・宮治・井上1995など)。

(II) ran→jan という音変化によってヤンが生じた(金沢1988など)。

(I) について、真田・宮治・井上(1995)は、五段動詞においてヘン(セン)からンへの回帰が生じていることに言及し、例えば「行かない」がイカセン→イカンのように変化するのに類推して、ミヤセン(見ない)の形をンによる打消形式に回帰させる形で生まれたのがヤンという形式であるとしている。これに対し金沢(1988)は、和歌山県におけるヤンについて、同県龍神地区にミラン(見ない)が存在することに着目し、一段動詞を五段活用させた際に生じるranという語尾が音変化を起こしてjanが生じたとしている。

本研究で分析・考察した内容を踏まえ、筆者はヤンの出自について、(II)の立場をとる。伊賀の高・中年層の間では、ン・ヤン型環境を除いて五段動詞に対してはヘン、動詞部分が1拍となる動詞に対してはヤヘンがデフォルトとして用いられているといえ、(I)が想定するようなンへの回帰、あるいはヤンへの移行によるヤヘンの衰退はみられない。その一方で、ン・ヤン型環境の一段動詞ではやはりヤンが専用されていることから、少なくとも伊賀においては(I)のような変化が生じる以前からヤンという形式が存在したことになる。よって、(I)のような変化が起こったとは考えにくく、(II)のように一段動詞を五段活用させることによって、ン・ヤン型環境における音韻制約の回避を図ったと考えられるのではないだろうか。

ただし、若年層の間でンへの回帰が生じていることは確かであり、ヤヘンの使用が減ってヤンの使用が増えている傾向も認められる。また、そもそもヤンを用いる必要のなかった変格動詞でのヤンの使用は、五段動詞からの類推によるものとも考えることもできる。よって、若年層におけるヤンの使用拡大については(I)の要因もある程度影響していると考えられるだろう。

いずれにせよ、五段動詞においてヘンを用いることができない場合に用いるというンの

使い方、あるいは一段動詞においてンもヘンも用いることができない場合に用いるというヤンの使い方は、現在では高・中年層において顕著である。特にヤンの場合、先の図2に示したように高・中年層が交代可能環境で用いることは稀であり、ヤンが多用されるのはンもヘンも用いることができない場合のみである。

これに対し、若年層は交代可能環境においてもある程度ンやヤンを用いており、中でも五段動詞におけるン、変格動詞におけるヤンは使用率がかなり高くなっている。このことから、高・中年層においてはン・ヤン型環境でしか用いられない否定辞であったンとヤンが、若年層の間で交代可能環境においても使用されるようになってきているとみることができる。

以上のことをまとめると、伊賀方言における否定辞の使用体系は、ここ 30 年ほどの間に図5のように変化しつつあると考えることができる。

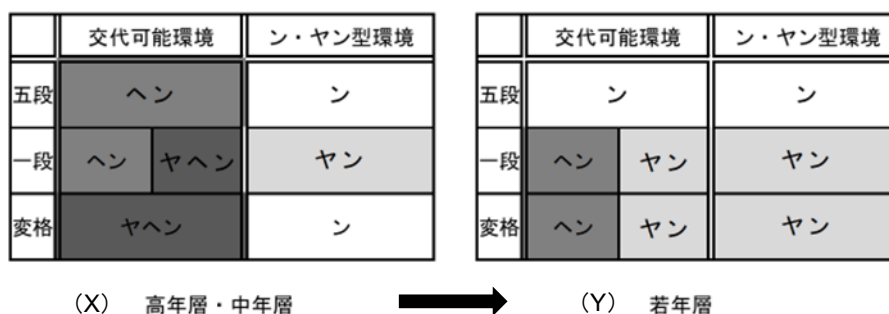


図5 否定辞使用の変化のイメージ

図のように、伊賀方言における動詞否定辞の使用は、交代可能環境においてヘン・ヤヘンを多用し、それらが使えない環境においてン・ヤンを用いるという体系 (X) から、いかなる環境においてもン・ヤンを用いるという体系 (Y) に変わりつつある。この変化は、「否定辞の体系としての合理化」と「音韻的な負担の軽減」という二つの指向に基づく変化と考えられる。

8.2. 否定辞体系の合理化

まず、伊賀方言における動詞否定辞使用の変化が目指すものとして、「否定辞の体系としての合理化」を挙げる。

5.1.1 で述べたように、ヤヘンは形態面で「～シハセヌ」からヘンに変化する過程における古い形式をとどめたものであると考えられる。また、ン・ヤン型環境ではヘンのみならずヤヘンも使用不可となるため、生起環境の面でもヘンと共通している。これらのことから、ヘンとヤヘンが使い分けられるのは基本的に動詞の活用の種類・拍数によってのみであり、少なくとも高・中年層の伊賀方言においてヤヘンはヘンの異形態であると考えることができる。

ンとヤンについても、ン・ヤン型環境において、五段動詞に対してはンが、一段動詞に

対してはヤンが、変格動詞に対してはその両方が生起する一方、ヘンとヤヘンは生起しえないため、生起環境の面で両者は共通している。ただし先述したように、高・中年層において、ヤンはヘンが使えない環境下での音韻制約の回避という目的で用いられるのに対し、若年層は本来ヤンを用いる必要のない交代可能環境においても使用するようになっている。

このように、伊賀方言において用いられる否定辞はン・ヤンの類（以下「ン類」とする）とヘン・ヤヘンの類（以下「ヘン類」とする）に大別することができるが、ヘン類はン・ヤン型環境では使用できず、使用に一定の制限が残存している。これに対し、ンは音韻制約が生じない限り（一段動詞に接続しない限り）いかなる環境においても用いることができ、ヤンも同様に五段動詞以外に対してはいかなる環境においても用いることができることから、ン類はヘン類に比べて汎用性が高いと考えることができる。

図5に示したように、高・中年層は主としてヘン類を、ヘン類が使えない場合（ン・ヤン型環境）にン類を用いていることから、使用範囲の異なる二種類の否定辞を併用していると考えることができる。これに対し、若年層は交代可能環境においてもン類を用いており、五段動詞においてはンの使用率が既にヘンを凌駕している。すなわち、この変化は、いかなる環境においても用いることのできる否定辞の使用にシフトすることで、二種類の否定辞の併用という状態を脱しようとする、否定辞体系の合理化の過程を示していると考えられる。

8.3. 音韻的な負担の軽減

続いて、否定辞の体系の変化について、「音韻的な負担の軽減」として、五段動詞の場合（8.3.1）と一段動詞・変格動詞の場合（8.3.2）に分けて位置づけを試みる。

8.3.1. 五段動詞の場合

五段動詞においては、若年層の間でヘンではなくンが多用されるようになりつつあるが、同様の傾向は近年大阪をはじめとする近畿地方の他地域でも報告されている。鳥谷（2015）はこの要因について、否定過去形式の五段活用で「～ヘン」＋「～カッタ」から「～ン」＋「～カッタ」の方向への変化が生じ、このことによって過去を伴わない単純な否定でも「～ン」の使用が増加しているとしている。また、高木（2004）は、否定辞の「-kaQ形」では五段・変格活用で否定辞～ンの使用率が高くなることを示しており、その要因を標準語形との対比、すなわち標準語形ナカッタと方言形ンカッタの拍数が同じであることに求めている。

7節での分析の対象からは外しているが、本研究で収集した用例において、五段動詞における「-kaQ形」の用例は高年層で1例、中年層で2例、若年層で17例みられた。このうち高・中年層ではンの使用が1例だけであったのに対し、若年層では15例でンが用いられていた。用例数が少ないため断言はできないものの、この結果から、8.2で述べた体系としての合理化と並行して、伊賀方言においても高木（2004）のいうように標準語との対比によって「ンカッタ」という形式が増加した結果、鳥谷（2015）が指摘するような否定形式全般でのンの増加が生じた、と考えることもできる。また、否定辞としてヘンでは

なくンを用いることで、動詞否定辞自体の拍数が少なくなるため、単純に音韻上の負担が減るといふ点も否定辞の使用に変化が生じる動機として挙げられるだろう。

8.3.2. 一段動詞・変格動詞の場合

一段動詞及び変格動詞の場合も、ン類、中でもヤンを使用することで、音韻的な負担の軽減を図ることが可能になる。その理由として、両者にヘン類を用いた際に生じる形態の音韻的な特殊性が挙げられる。

高木（2004）は、関西若年層の一段動詞の否定形において、標準語形の～ナイの使用率が高まっていることを指摘している。これによれば、一段動詞2拍語に～ヘンを接続させたときに生じる、キーヒン《着ない》やネーヘン《寝ない》といった語幹が長音化した形式（長呼形語幹）は、一段動詞2拍語およびカ変・サ変動詞の否定形にのみ現れる特殊な形態であるため、話者の記憶の負担を軽減しようという内的な動機によって類推平準化（analogical leveling）が起きた結果として、～ヘンの使用が避けられているという。

先述したように、伊賀方言においては、主として高・中年層の間で、動詞部分が1拍となる動詞に対するデフォルトの否定辞としてヤヘンが用いられてきたが、若年層の間ではヤヘンの使用がみられなくなり、特に変格動詞において長呼形語幹が生じるヘンの使用が多くみられるようになった。また、中年層のヘンの使用率も高年層に比べて高い。これには大阪方言の影響など外的な要因も考えられるが、長呼形語幹が生じるヘンの使用も伝統方言形のヤヘンの使用も、否定辞の体系の中では音韻面で特殊な形式であるといえる。

これに対し、否定辞としてヤンを用いると、これらの特殊な形式の使用からの脱却が可能になり、また否定形式全体での音韻面での統一を図ることが可能になる。先述したように、近年五段動詞においてンの使用の増加が近畿地方の広域で報告されているが、本研究の調査から伊賀方言においてもその傾向がみられることがわかった。この状況を踏まえると、否定辞としてヤンを使用すれば、五段動詞と同じ「ア段音＋ン」の形を作り出すことができ、音韻面での整合性をとることができる。このことから、伊賀の若年層の間では、長呼形語幹の形式をある程度受容した親世代の影響で長呼形語幹の形式を使用しつつも、ン・ヤン型環境における一段動詞の音韻制約の回避策として受け継がれてきたヤンを交代可能環境にも汎用することで、音韻的な負担を軽減しているものと考えられる¹³⁾。

13) 変格動詞に対しては音韻制約が生じない（ンを用いることができる）ため、若年層の間で五段動詞でのンの使用率が上がっていることを考慮すれば、変格動詞ではセン・コンという形式の使用が広がるとも考えられるが、実際はヤヘンの使用がみられなくなり、かわってヘン・ヤンの使用が大半を占めるようになってきている。これに関連して、鳥谷（2015）は、近年ヤンの使用がみられるようになった近畿中央部の若年層において、五段動詞でのンの使用が拡大しているにもかかわらず「見ない」「来ない」「しない」がミン・コン・センにならない理由について、「これまで使われ、勢力の強かった大阪弁や京ことばの語形（セン由来の）ヘン類の語感から大きく異なるからであろう」としている。伊賀の高・中年層では、語幹1拍一段動詞および変格動詞の否定形に対してはデフォルトの否定辞としてヤヘンが用いられるが、シャヘン・キヤヘンの拍数が4拍となるのに対し、セン・コンでは2拍となり、伝統的に用いられてきた形式との乖離が大きいために受容されにくくなっている。

8.4. 体系変化の要因

最後に、「否定辞体系の合理化」と「音韻的な負担の軽減」を求める否定辞使用の変化が、いかなる要因によって生じたのかについて、分析の結果に基づいて言語内的側面から検討する。

7 節での分析の結果から、否定辞使用の変化は中年層と若年層の間で生じていることが窺える。この変化が生じた要因の一つとして、ン類とヘン類の出自の違いに基づく意味的・統語的な差異の消失が、若年層の間で一層進んでいることが挙げられるのではないかと筆者は考えている。

既に述べたように、否定の強弱という面での否定辞の意味的差異自体は早い時期から失われていたことが報告されている。本研究における分析の結果からも、高・中年層の間ではヘン類がデフォルトの否定辞として使われていることがわかり、一段動詞のようにそもそもンの使用が忌避される動詞もあることから、やはり意味の強弱に応じた使い分けはなされていないとみることができるだろう。

一方、7.1.3 でみたように、高・中年層の間では従属節中でのヘンの使用が抑制されており、ヘンの出自に基づく統語上の制限が維持されているものと思われる。これに対し、若年層では文中での生起位置と否定辞の選択に相関はみられない。このことから、若年層の間で、否定辞の意味上の区別は言うに及ばず、それまで維持されてきた否定辞の統語的な区別までもが薄れつつあることが窺えるのではないだろうか。つまり、時代が進むにつれて、交代可能環境において、ン類とヘン類を使い分ける必然性が完全に消失しつつあるということである。

これに対し、「本来の打消」たるン・ヤン型環境におけるン類の専用は、若年層の間でも維持されており、これをヘン類で代替することはできない。よって、体系としての合理化を求める意味でも、音韻的な負担を軽減する意味でも、2 種類の否定辞のうちン類がデフォルトとして選択されるようになりつつあると考えられるのではないだろうか。すなわち、若年層におけるン類の使用の拡大は、「本来の打消」としてのンへの回帰によって、否定辞のン類への一本化を目指す変化であると考えられるのである。

9. まとめ

ここまで述べてきたことをまとめると、以下ようになる。

- 【I】 伊賀方言において、動詞否定辞が用いられる統語環境には、接続可能な各否定辞が互換性をもつ環境（交代可能環境）と、世代を問わず動詞の活用の種類に応じてン・ヤンが専用される環境（ン・ヤン型環境）の 2 種類が存在する。前者の場合、動詞の活用の種類・拍数・動詞否定辞の文中での生起位置といった属性に応じて優先して用いられる否定辞が存在する。

るものと考えられる。また、7.2 で言及したように、ン・ヤン型環境の場合、世代が若くなるほど変格動詞におけるンの使用率が下がりヤンの使用率が上がる傾向にあるが、ここでも「動詞+否定辞」で2拍になるという特殊な形態が忌避された結果ヤンが用いられるようになったものと考えられる。

【II】 動詞否定辞の使い分けには、高・中年層と若年層の間で大きな差異がみられる。

動詞の否定形では、交代可能環境において、前者では動詞の活用の種類・拍数に応じてヘンまたはヤヘンが常に多数派となり、従属節中に生起する場合を除けばそれらがほぼデフォルトとして用いられる。一方後者では、五段動詞においてンの使用率がヘンの使用率を大きく上回り、五段動詞以外でヤンの使用も目立つようになる一方、ヤヘンの使用はほとんどみられなくなる。また、ン・ヤン型環境について、五段動詞ではン、一段動詞ではヤンが世代を問わず専用されるが、変格動詞では世代が若くなるほどンではなくヤンを用いる傾向が強まる。

アスペクトの否定形では、ヘンを多用する高・中年層とは対照的に、若年層ではナイの専用に向かっており、関西方言と同様の傾向がみられる。

【III】 高・中年層と若年層の間にみられる否定辞使用の変化は、ン類とヘン類という使用範囲の異なる2種類の否定辞の併用という状態から脱し、より汎用性の高いン類の使用へ統一しようとする「否定辞体系の合理化」と、標準語との均衡を図ると同時に、音韻面で特殊な形式の使用を避けようとする「音韻的な負担の軽減」を指向するものであると位置付けられる。この変化が生じた言語内の要因として、若年層の間で否定辞の統語上の差異の意識が薄れつつあることが挙げられる。

本研究では、伊賀方言における動詞否定辞について、談話における用例に基づいて世代間での使用のあり方の変化を言語内の側面から分析した。分析の結果から、若年層の間で伝統方言形からの変化が生じつつあることが明らかになったが、若年層におけるン・ヤンの使用の増加は、伊賀のみならず近畿中央部で近年広く報告されるようになった事象である。本稿ではそのメカニズムについて、ン・ヤンが専用される環境（ン・ヤン型環境）および一段動詞の音韻制約との関連に着目して考察を行った。特にヤンの使用についてこの点に着目した研究は管見の限り存在せず、新たな視点から考察を加えることができたのではないかと考える。本研究は伊賀という狭い地域を対象としたものに過ぎないが、5.1.1でも挙げたように、鳥谷（2015）は近畿中央部の若年層でのヤン使用について、三重県から大阪府へ通学する学生からの持ち込みの可能性を示唆しており、伊賀から大阪府への人口流動が比較的多いことを踏まえれば、この視点は関西他地域の否定辞使用の変化について考察する際にも注目すべきものであるのではないかと考えている。

その一方で、本研究はあくまでも方言変化のメカニズムを言語内の要因のみに着目して考察したものに過ぎない。方言変化には、内的動機のみならず、標準語や他方言との接触も大きな影響を及ぼす。例えば、7.3で示したアスペクトの否定形における標準語形式の使用の増加は、高木（2004）がいうように、標準語形の受容の結果に他ならない。その他にも様々な社会的属性によって言葉の用いられ方に違いがみられる可能性も大いにあるが、本研究ではそれらの要因にまで踏み込むことができなかった。また、分析を加えた部分についても、用例数が十分でなく傾向を掴み切れなかった部分があることも否めない。今後は他地域も視野に入れたより網羅的な研究を行うことが求められるだろう。

【参考文献】

- 榎垣実 (1962) 「三重県方言」榎垣実編『近畿方言の総合的研究』pp.93-115, 三省堂.
- 金沢裕之 (1988) 「打消表現」(徳川宗賢・真田信治「和歌山県中部域の言語動態に関する調査報告」)『日本学報』7, pp.175-186, 大阪大学文学部日本学研究室.
- 郡史郎 (1997) 「大阪方言の特色」平山輝男ほか編『日本のことばシリーズ 27 大阪府のことば』pp.11-61, 明治書院.
- 国立国語研究所 (1999) 『方言文法全国地図 第4集—表現法編2—』, 国立国語研究所.
- 真田信治 (1987) 「ことばの変化のダイナミズム 関西圏における neo・dialect について」『言語生活』429, pp.26-32.
- 真田信治・宮治弘明・井上文子 (1995) 「紀伊半島における方言の動態」徳川宗賢・真田信治編『関西方言の社会言語学』pp.81-102, 世界思想社.
- 高木千恵 (1999) 「若年層の関西方言における否定辞ン・ヘンについて—談話から見た使用実態—」『現代日本語研究』6, pp.78-99, 大阪大学文学部日本語学講座.
- (2004) 「若年層関西方言にみる言語変化のタイプ」『日本語科学』16, pp.25-46, 国立国語研究所.
- 鳥谷善史 (2015) 「関西若年層の新しい否定形式「～ヤン」をめぐって」『国立国語研究所論集』9, pp.159-176, 国立国語研究所.
- 中井精一・能美仁 (2013) 「伊賀上野言語地図」『都市の地域中心性と敬語行動』平成 24 年度科学研究費報告書 (基盤研究(B)(1)), 富山大学人文学部日本語学研究室.
- 日高水穂 (1994) 「近畿地方の動詞の否定形」GAJ 研究会編『方言文法 1 — 『方言文法全国地図』分析—』pp.55-77, 大阪大学文学部日本学科学言語系研究室.
- (2014) 「近畿地方の方言形成のダイナミズム 寄せては返す「波」の伝播」小林隆編『柳田方言学の現代的意義—あいさつ表現と方言形成論—』pp.227-244, ひつじ書房.
- 前田勇 (1955) 「大阪方言における動詞打消法」『東条操先生古稀祝賀論文集』(再録: 井上史雄ほか編 (1996) 『日本列島方言叢書⑩ 近畿方言考④ 大阪府・奈良県』pp.184-209, ゆまに書房).
- 宮治弘明 (1997) 「都市方言研究への一提言」『梅花女子大学文学部紀要 日本語・日本文学編』31, pp.1-12, 梅花女子大学文学部.
- 矢野文博 (1956) 「打消しの助動詞の一系譜—ヤンについて—」『三重大学学芸学部研究紀要』16, pp.73-87, 三重大学教育学部.

なかた ひろき (大阪大学卒業生)